

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

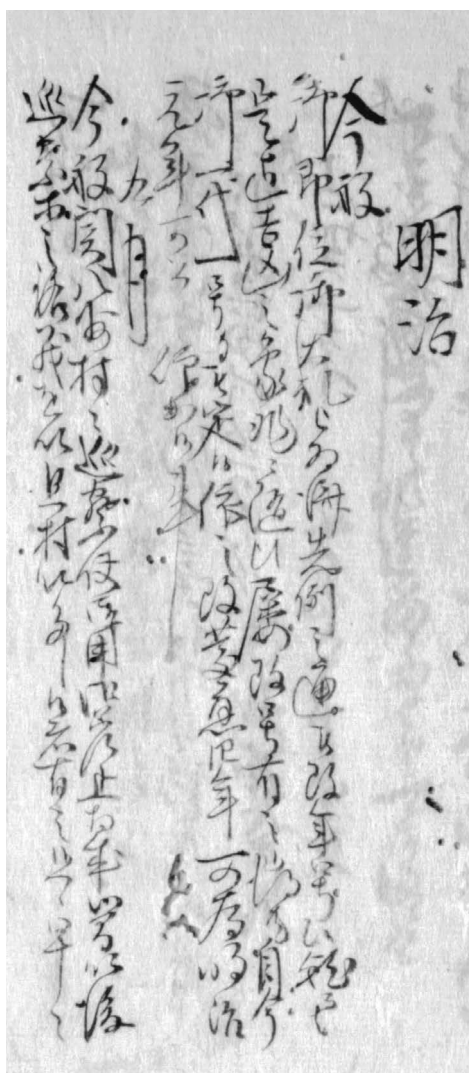
al museo

2020年3月20日

No.131

もくじ

- 1-2 改元を考える
その肆「明治」改元
で一世一元制へ
- 3 最近の発掘調査
透かし飾りのある火
打金を発見
- 4-5 NOTE
多摩川は、なぜ玉
川かータマ川の名
称由来小考ー
- 6 府中の身近な昆虫絵巻
⑧キラわれ者の悲哀
- 7 展示会案内 特別展
日本星景写真協会写
真展「星の風景」
- 8 平成史に残る天文・宇宙
イベント
④記憶に残る彗星



慶応4年の「御用留」
(押立 川崎平左衛門家文書)

改元を考える

平成から令和へ。新しい時代の幕開けだと世の中は少しウキウキしているようです。時代によって人びとの〈改元〉^{かいげん}に寄せる思いは異なっていました。地域に残るモノをとおして、〈改元〉について考えるシリーズの最終回です。

その肆

「明治」改元で一世一元制へ

左の史料は、^{おしたて}押立村（現 押立町）の慶応4年（1868）の「御用留」です。「御用留」とは、支配役所から出された通達などを書き留めた帳面で、その中に明治改元の記録が残されていました。その内容を見ると、改元とあわせて、今後「御一代一号」と定められたことが記されています。

改元を考える

その肆…

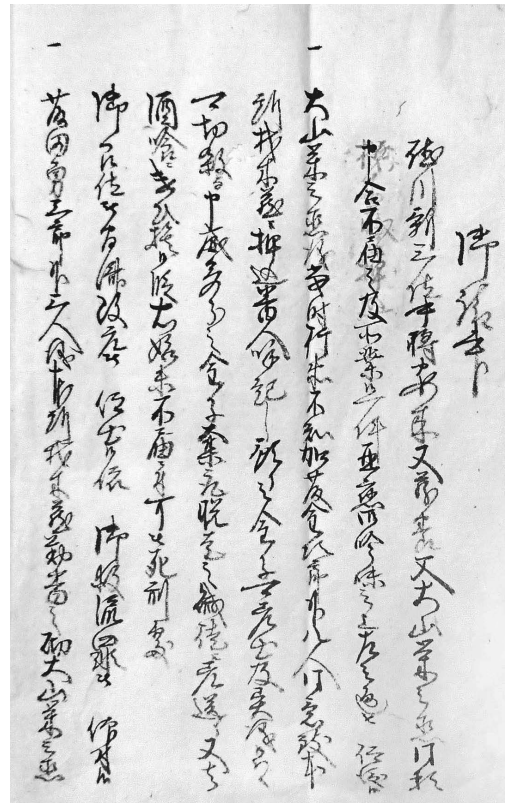
「明治」改元で一世一元制へ

明治、大正、昭和、平成と天皇の代替りとともに元号が改められ、昨年5月からは令和となりました。このように、一代の天皇に一つの元号が用いられるようになったのは、明治時代以降です。それまでは、吉事・凶事などにより改元されることが、しばしばありました。例えば、明治天皇の先代・孝明天皇の在位約20年の間には、6回の改元が行われています。一番長い嘉永で6年11か月、最短の万延は1年弱でした。

天皇一代に一元号を用いることを、「一世一元」制と言い、慶応4年（1868）9月8日に発布された改元詔書により制度化されました。この詔書を受けて、明治政府の行政官が管轄地域に出した通達の写しが、表紙写真の史料です。差出は武蔵知県事・古賀一平役所、日付は辰9月19日とあります。そしてそこには、天皇の即位を受けて明治と改元し、旧制を改めて今後は「御一代一号」とすると記されています。

何しろ270年あまり続いた江戸幕府の支配を一新する、大きな節目の改元です。そこを「一世一元」制の始まりとすることに大きな意味があったのでしょう。「明治」という元号は、複数の候補の中から明治天皇が籤をひいて選んだと言われています。このような決め方は後にも先にもこの時だけのようですから、それだけ特別な改元だったことがわかります。

さて、近代には即位や親王誕生などの際に、受刑者の刑罰を軽くしたり消滅させたりする恩赦が行われました。右上の写真は、明治天皇即位の恩赦に伴う史料です。作成日は明治2年（1869）



明治改元に伴う恩赦の請書（是政 三岡源太郎家文書）

5月14日。恩赦を受けたのは、猿江（現 江東区）の材木蔵に押し入り、勤番を脅して預り金を奪い取った10人の賊徒と、材木蔵の勤番4人です。賊徒らは死刑のところを流罪に減刑され、勤番たちは預り金を奪われた責任を不問に付されることになりました。勤番の中には是政村（現 是政）の者が含まれていたことから、この史料が府中に残っていたのです。

賊徒のリーダー格と思しき人物は「徳川新三位中将」（徳川家達）家来の養父と記されていますので、江戸時代は幕臣だったものと思われます。そして、勤番の4人もまた旧幕臣…。この略奪が起こった時期は明記されていませんが、戊辰戦争など当時の時代背景を考えると、単なる強盗事件ではなく軍資金の調達などを目的としていた可能性も考えられます。

ともあれ、改元の8か月後にこの史料が作成されていることから、ある程度の期間を経ても恩赦が行われていたことがわかります。死刑から流罪へ…、恩赦を視野に入れた犯行ではないでしょうが、賊徒たちにとっては勿怪の幸いだったといえるのかもしれませんが。（花木知子）

透かし飾りのある

火打金を発見

美好町3丁目

府中市ふるさと文化財課

野田 憲一郎



美好町3丁目出土の火打金

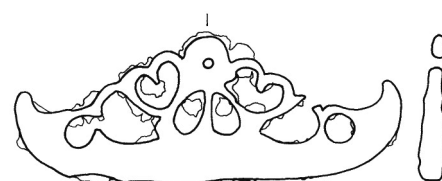
火打金とは、火打石と打ち合わせて火花を起こすための鉄製の道具で、明治時代にマッチが普及するまでは主な発火具の一つでした。遺跡で見つかる火打金の形はさまざまですが、昨年、美好町3丁目の発掘調査で、大変珍しい透かし飾りのある火打金が発見されました。

発見した現場は、鎌倉街道上道に面した八雲神社の西側にあります。出土した火打金の形は、山形にした鉄板の両端を上方に反り返した形をしています。大きさは、全長9.3cm、高さ2.8cmで、頂部に紐を通すための小孔が開けられています。

透かし飾りは山形の部分に施され、半分ほどが欠損しています。頂部の小孔を中心に、左右に形の異なる孔を4対配置することで、頂部から両端にかけて連弧状の文様が形作られています。頂部小孔の両側に配されたハート形の文様は猪目文といい、神社仏閣の飾り金具などによく用いられ、火除け・魔除けの意味があると言われています。出かける人に清めの火を打ちかける、切り火といった風習もあることから、火起こしの目的以外に、穢れを払う儀礼にも使われていたことが想像できます。

今回発見した火打金は、古墳時代～中世の遺物包含層から出土したため時代の特定は難しいのですが、他の発掘事例を見ると装飾性の高いものは中世の遺跡から多く出土しています。関東では、鎌倉市の出土数が突出しており、なかでも孔が6つ以上開くものは13世紀末から14世紀後半の遺構から見つかっています。このことから、今回発見した火打金は、鎌倉時代のものの可能性が高いと言えます。

この火打金の出土地点は、鎌倉街道上道から府中の中心地である六所宮（大國魂神社）方面へ向かう道路の分岐点にあたる場所で、分倍と呼ばれていました。分倍周辺では中世の遺構が見つかっており、宿のような交通集落が形成されていたと考えられています。透かし飾りの火打金が府中の地にもたらされたのは、鎌倉街道を通じて人の往来や物の流通が頻繁に行われていたことが背景にあると言えるでしょう。



炭焼遺跡出土の火打金
『山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第237集』より



美好町3丁目出土の火打金

0 5 cm

山梨県南都留郡富士河口湖町の炭焼遺跡から出土した透かし飾りの火打金は、装飾が今回発見したものと酷似しています。遺物包含層中からの出土で時代が特定されていませんが、この文様には同一の規格があったようです。

多摩川は、なぜ玉川か —タマ川の名称由来小考—



郷土の森博物館南側より望む多摩川（左）と錦絵「武蔵国 調布の玉川」（右）
似ていませんか？

▼ 多摩川か、玉川か

山梨県の秩父山地を源流に、東京都多摩地域を貫流し、都県（神奈川県）境の東京湾に注ぐ、全長 138 km の多摩川。かつて玉川と書かれたこともあり、その表記は今も所々で使われています。多摩川と玉川、どちらが本来のものか。歴史的な経過のなかで考えてみることにします。

この川の初見は奈良時代の『万葉集』東歌で、「多麻河伯」と書かれています。これは一字一音の万葉仮名と呼ばれる表記で漢字自体には意味がありません。平安時代の和歌集などでは「玉河」「多磨河」と書かれています。

一方、律令制で中流域は「多磨郡」に編成されますが、この郡名を古代の文献では「多磨」「多麻」、武蔵国府・国分寺跡から出土する文字資料では「多磨」「多麻」「玉」と多様に表記されています。古代の段階で川の名も「多磨川」「多麻川」「玉川」の三種が出揃っているようです。

▼ 地名と川の名前、どちらが先？

この問題を考えるためにタマの地名とタマ川の河川名、どちらが先かという設問をします。つまり多磨郡を流れていたから多摩川になったのか、

多摩川が流れていたから多磨郡になったのか。ここでポイントとなるのは、タマの地名は他にほとんどないのに対し、タマ川という川は全国どこにでもあるという事実です。古代においては『常陸国風土記』に「玉川」が出てきます。和歌の名所である歌枕の「玉川」が山城（京都府井手町）・摂津（大阪府摂津市）・近江（滋賀県草津市）・陸奥（宮城県多賀城市）・紀伊（和歌山県高野町）にもあり、武蔵の多摩川も含めて「六玉川」にまとめられます。「玉川」は自然発生しやすい川の名前と考えられます。

もう一つのポイントは、多磨郡のタマが広域地



山城国 井手の玉川（京都府井手町）



陸奥国 野田の玉川（宮城県多賀城市）

名らしいことです。武蔵国には 21 郡あり、そのうち 7 郡に郡名と同じ名前の郷名がありますが、多磨郡には多磨郷がありません。橋樹郡橋樹郷、荏原郡荏原郷のように郷名を昇格させて郡名にしたのではありません。これらの地名は国家が付けたものと思われませんが、自然発生しやすい川の名前が先にあって、川に因んで郡名が決められた可能性が高いのです。

▼ 多摩川はなぜタマ川か

川の名前が先だとすると、なぜタマ川と呼ばれることになったのか。先の『常陸国風土記』の「玉川」（現在の茨城県常陸大宮市・那珂市）の例が参考になります。そこでは「赤い琥珀に似た石が混じっていた。だから玉川と名付けた」と説明されています。諸国の風土記にはとても信じられないような地名由来説話が多いのですが、これには真実味があります。

また、『万葉集』の他の東歌や防人歌で大切な石・美しい石を意味する「玉」を「多麻」と書いた例がいくつもあるので、「多麻河伯」と表記された多摩川のタマも「玉」である可能性が大きいのです。

多摩川の名前も美しい河原石から来ているのではないのでしょうか。今は失われた「武蔵国風土記」の文を想像してみましょう。「多磨の郡に、山中より流れ、東に流るる大なる河あり。河原に多くの玉石ありて、白玉に似ていと好し。以ちて玉川と名付く…」

▼ 玉川から多磨川へ

最初が多摩川の名は漢字で書けば「玉川」だったのでしょうか。7 世紀後半、律令国家成立によりムサシ国が誕生し、多摩川中流域は川に因んで「玉評」と名付けられました。701 年の大宝律令

制定により「玉評」は「玉郡」となり、さらに 713 年の行政地名改正は地名を好字二字にすることが求められました。「无耶志国」は武蔵国になり、「玉郡」は「多磨郡」になりました。「磨くこと多くして玉となる」ということでしょうか、めでたい字で表されました。こうして川の名に充てる漢字も郡の名に合わせて「多磨川」と表記されることにもなったのでしょうか。以上のような経過が想定できると思います。

因みに「武蔵」がどうしてもめでたい字かと言うと、武器がお蔵入りになる。武器が不要となる。すなわち平和の到来ということなのです。

▼ 多波川と丹波川

平安時代になると『延喜式』のように多磨郡をタバと読んだ例、室町時代には「多波川」「多破川」と書いた例が見受けられます。発音が訛った感じですが、これと関連して気になるのが多磨川の最上流部（山梨県塩山市）を今も丹波川と呼ぶことです。これらはタバ川・タワ川という名前で共通します。憶測ですが、タマ川がタバ川に転訛していた時代に最上流部の開発が行われ、本流の名をもって地名化したものと考えておきます。

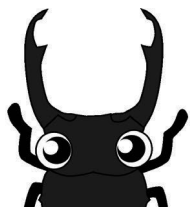
▼ 玉川、復活！

「玉」に語源を持つ多摩川は、「多磨川」の表記を経て、江戸時代に再び「玉川」と書かれることが多くなります。「多磨川」として立項した『江戸名所図会』には、「六玉川」に合わせて「玉」の字に替えたと書いています。それとともにこれには文芸の世界の影響が大きいと考えられます。実際に多摩川は玉石に恵まれていたのですが、例えば多摩川に親しんだ大田南畝の詩文を読んでいくと「水声錚々鏘々として玉を鳴らす如し…」「玉水清流を激しうす…」などの表現が目立ちます。多摩川に「玉」を連想することが多くなり、自然に「玉川」と書かれることも増えていったのではないかと思います。

府中においても多摩川の「玉」に親しんだことでしょう。六所宮（大國魂神社）神主の和歌集を見ると、ありました。「夏の夜玉川に逍遙して瀬をとめてあそぶほたるは川の名にながるゝ玉と誰か見ざらむ」「玉川の松原に松露をひろひて川の名の玉とやこれもひろふべき峯の真砂の松の下露」（猿渡盛章）、「わすれずよ君にたぐひて玉川の石ひろいにいでしむかしを」（猿渡容盛）…。

府中の身近な

昆虫絵巻

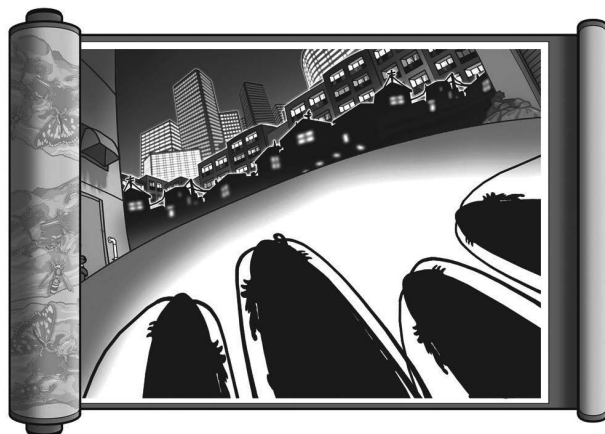


⑧ キラわれ者の悲哀

さて今回は本シリーズの締め括りとして、皆さんに最も身近な昆虫を選びました。但し、最も嫌われている昆虫でもあります。もうお分かりですね・・・都市を黒く塗りつぶす悪役の代表・ゴキブリの登場です。夏場の家屋に顔を出し、大騒ぎの源となる厄介者の筆頭ですが、何故にこうなってしまったのでしょうか。本来のゴキブリについて説明しましょう。

元祖ゴキブリは、約3億年前には出現していました。海では三葉虫から有孔虫へと主役が交代し、大型のシダが生い茂る水辺には両生類やムカシトンボが飛んでいた遙か昔の時代です。人類の大先輩であり、本来は熱帯・亜熱帯の森林に生息する、カブトムシやクワガタと何ら変わりのない昆虫なのです。大昔の人が穴ぐらのような住居を構え、食糧を蓄えるようになった時、初めて野外に生息していた一部のゴキブリがそこに入り込み、食物を失敬するようになったと考えられます。味を占めた彼らは、野外より温暖で、かつ風雨にさらされることもなく、天敵から身を守ることとも可能な安楽の場所で次第に繁殖し、人と共に分布を広げていったのでしょう。

熱帯を中心に全世界で4,000種と言われるゴキブリですが、国内では全国的に50種前後が生息します。日常的に遭遇するのは、外来のチャバネゴキブリ・クロゴキブリがほとんどです。これに在来のヤマトゴキブリ、家庭暖房の発達した関東に九州以南から北上したワモンゴキブリなどが混ざります。誰でも知る所のゴキブリですが、文献に初登場したのは江戸時代で、アブラムシなど多岐にわたる名称で紹介されています。但し、江戸で暮らす人々が今ほどゴキブリで騒いだ



話はあまり聞きません。厄介者になったのは、昭和40年代あたりからだと推測出来ます。これは丁度国内が高度経済成長期の波に乗った時期でもあります。戦後しばらく物資が乏しい時代は、人々の食糧すら不足し、とてもゴキブリに与える残飯など出る由もなかったのです。また、寒い冬を凌ぐのは炭火のコタツや火鉢しかなく、寒さに弱い南方系のゴキブリが住宅内に住みついたところで繁殖などしようもありませんでした。まさにその後の人間生活向上が、新たに人家生活型のゴキブリを定着させたと言えるでしょう。余剰食糧が無駄に費やされ、暖房設備は進歩し、ゴキブリにとって人家こそこの上無い安住の地と化したわけです。一か所に留まることを知らない彼らは自らの脚で、または交通手段を駆使して、瞬く間に増えていきました。こうして勢力を増大したゴキブリは、嫌われ者の代表格となり現在

に至ります。家庭の食糧を食い荒らすことはもちろんですが、何より病原菌の媒介者であることが重要事項です。彼らは台所を始め、風呂場・便所・下水道などを歩き回することで、菌の付着した体のまま、食物・食器に触れるわけですからたまったものではありません。見た目の気味悪さと、こうした実害とが重

なり、ゴキブリは完全に人の敵という立場に追いやられたのです。

ですが、ちょっと待ってください。ゴキブリはあくまでも森林性の昆虫であることを忘れてはいけません。しかも、家屋害虫に転じているのは総数のわずか1%にも満たないと考えられています。国内でも在来のおオゴキブリをはじめ、低山地で暮らす者が多く、不潔でない種が大半です。経済成長は、ゴキブリの生息地である森林も開発により侵食しました。本来の住処を追われる形で彼らの一部が辿り着いた先が、皮肉にも同じく経済成長によって生み出された都市空間だったとしたら・・・不本意な悪のレツテルですね。ゴキブリと聞いただけで嫌悪感を抱く我々は、もう一度考え直すべきかも知れません。でもやっぱり嫌だなあ・・・ゴメンナサイ。（中村武史）

日本星景写真協会写真展 「星の風景」

4/18（土）～ 7/5（日）

会場：本館 1 階特別展示室

今回の特別展は、星空と地上の風景を融合させた星景写真展です。「日本星景写真協会」に所属する 38 人の写真家たちによって撮影された貴重な瞬間が、60 点の作品となって並びます。撮影地は、北は北海道、南は九州まで。中には日本を飛び出し、オーストラリアやアルゼンチンで撮影したものもあります。ここでは、それらの中から 3 点の作品をご紹介します。

まずは、美しい風景と星空がコラボレーションした「暁月に染まる平成新山」（写真左下・竹之内貴裕氏撮影）。ここに写る山は、1990～95 年の火山活動で長崎県の雲仙普賢岳にできた溶岩ドームです。星空をバックに月が山頂を照らす、雄大な作品です。

次の 1 枚は「宝珠を包む月の舟」（写真右上・船橋弘範氏撮影）。日本の古い建物には月がよく似合います。ただ、建物の近くで撮ると、月がとても小さくなりこれほど印象的な写真になることはありません。備中（岡山県）国分寺の五重



塔と月、金星を写したこの作品は、320 mm の望遠レンズで離れたところから、有明の月が舟のように浮かぶ絶妙なタイミングを捉えたものです。

そして最後の作品「雨の予兆」（写真右下・安藤宏氏撮影）。空の暗いところでは、天の川を見ることができます。天の川は、私たちの住む地球も含めて 1,000 億個以上の星の大集団です。その形は「どら焼き」の様に中心が膨らみ、周辺に行くほど星が少なく、平たくなっていきます。地球から見た天の川の中心は、夏の星座のいて座方向でとても濃く見えます。一方、端は冬の星座方向にあり、逆に薄く見えます。この作品は、天の川の中心方向を捉えたもので、明るく輝く天の川と黒い雨雲との対比が神秘的な雰囲気を生み出しています。

今回の展示会には、ポスターにして飾りたくなるような、素晴らしい星空と風景の写真が集結しています。この機会にぜひ心ゆくまでご鑑賞ください。また、会場の外には府中で撮影した星空の写真を展示します。合わせてご覧ください。

（本間隆幸）

平成史に残る天文・宇宙イベント

④記憶に残る彗星

太陽系の旅人「彗星」は、太陽の周りを楕円軌道で回っています。周期が200年以内のものは、おもに海王星の外側にある「エッジワース・カイパーベルト」という天体の集まりからやってきます。200年より長いものは、太陽系を大きく球状に囲む「オールトの雲」からやってくると考えられています。

彗星は、核の大きさが数km～数十kmと、とても小さな天体です。彗星の核は8割が氷で、二酸化炭素や一酸化炭素、わずかな塵が混ざっており、「汚れた雪だるま」にたとえられます。太陽から遠いところを旅している時、尾はありません。太陽に近づくと表面が溶け、核の周りをガスや塵が球状に覆います。これを「コマ」と呼びます。「コマ」から太陽の反対側に尾が伸びますが、白い尾は塵からなる「ダストの尾」、青い尾はイオン化したガスからなる「イオンの尾」です。

筆者が、最も強く記憶に残っている彗星は「ヘール・ボップ彗星」です。平成9年（1997）3月に地球に接近し、1等級よりも明るい0等級になりました。ヘール・ボップ彗星は核の直径が約60kmと、かなり大きな彗星です。平成9年初頭から5月ごろまで肉眼で見ることができ、地球接近時には新宿などの繁華街でも見える彗星として大きな話題になりました。彗星の明るさと観測期間の長さから、平成最大の彗星といえる「ヘール・ボップ彗星」。次にこの彗星が訪れるのは、西暦4500年ごろの予定です。

もう一つの忘れられない彗星は「百武彗星」です。ヘール・ボップ彗星が話題になる前年の平成8年1月、鹿児島県在住の百武裕司さんが発見しました。3月には地球に約1,600万kmまで近づき、0等級になりました。太陽と地球の間が約1億5千万kmですから、太陽－地球間の約10分の1の距離まで地球に近づ

いたことになります。スピードも速かったため、彗星が日々、星座の中を移動していく様子が確認できました。百武彗星を見やすくするため、東京タワーのライトアップが消灯されたこともありました。長い尾が特徴で、偶然、尾の中を通過した探査機の記録から、尾が5億7千万km以上伸びていたことがわかりました。観測史上、尾の長さナンバーワンとなった百武彗星ですが、肉眼でははっきりと見たのは、数日間だったことが残念です。

平成に訪れた彗星の中には、私たちの目の前で、はかなく消えていったものもあります。平成6年に木星に衝突した「シューメーカー・レヴィ第9彗星」と、平成25年に太陽のすぐそばで崩壊・蒸発した「アイソン彗星」です。もしもこれらの彗星が地球にぶつかっていたら…と心配になるような出来事でした。

令和に入り、新たな種類の彗星が訪れました。令和元年（2019）12月に太陽に近づいた「ボリソフ彗星」です。この彗星は、観測技術の発展により、初めて確認された「恒星間彗星」、つまり太陽系の外からやってきた彗星です。新たな時代、彗星がどこからやってきたのか、より詳しくわかるようになっていくでしょう。

（小林則子）



ヘール・ボップ彗星（平成9年3月、立川市）
撮影：近藤弘之